

川崎市市民ミュージアムでの民俗資料レスキューについて

シルク博物館 高橋 典子

1. はじめに

2019年10月13日、知人から台風19号によって川崎市市民ミュージアム（以下、市民ミュージアム）周辺が水没しているとの一報を受けた。1988年の開館時から2017年まで学芸員として長く勤務させていただいた博物館の被災は、にわかには信じがたいものであった。市民ミュージアムは博物館と美術館あわせて9つの専門分野を持ち、それゆえに収蔵品数も多く、およそ26万点を有している。それらの収蔵品は地下に設けられた9室の収蔵庫に収められている。収蔵庫のある区画までは大きなシャッターが3枚あり、そのさらに先に頑丈なスチール製の扉があり、各収蔵庫も扉で隔てられているので、もしかしたらそれほど被害ではないかも、と一縷の望みを持っていた。しかし、排水作業がなかなか終わらない。排水が終わったのが10月16日の夜で、その頃には相当の被害があるだろうことを覚悟していた。その被害がどれほど甚大なものであったかは報道等で明らかになったとおりである。その後、全国の様々な組織が協力して被災資料のレスキューが始まり、昨年6月には被災した収蔵品の搬出が終わったとのことである。

本稿では、市民ミュージアムにおける民俗資料のレスキューに関わらせていただくなかで得た知見や感じたことなども含め、現時点での「まとめ」として記してみたい。

2. 被災した収蔵庫

被災後、はじめて収蔵庫に入らせてもらったのは10月29日であった。地下の環境が劣悪ということで、防護服を着こみ、ゴム手袋、ヘルメット、長靴、ゴーグル、DSⅡのマスクを装着して向かった。マスク越しにも臭気がきつく、湿度は100パーセントに近いとこのことで非常に蒸し暑く息苦しい。40分以上は作業できないと言われたことがよく理解できた。この日、最も衝撃的だったのは、第3収蔵庫のスチール製の扉が折れ曲がっている光景である。第3収蔵庫は主に古文書など歴史資料が収められているが、半分溶けたようになっている文書箱や、床板に中性紙封筒らし

き紙片が固着しているのも見て取れた。

民俗資料が入っている第1収蔵庫はカビが発生しているということで閉め切られていた。入口から覗いた限りでは、入ってすぐの収蔵棚はあまり変わった様子もなく、棚の一番上に乗っている背負いかごがもとのまま収まっていて、荒れた様子は感じなかった。しかし、視線を下に落とすと、床板はところどころ下から突き上げられたように跳ね上がり、大型の民具や収納タンス類が倒れこんでいて、とても中に入れるような状況ではないことがわかった。

翌10月30日、「神奈川県博物館協会（以下、県博協）」より加盟館園へ市民ミュージアムへのレスキュー要請文書が届いた。ただし、実際に民俗資料のレスキューが始まったのはそれから1か月半近く後のことである。レスキュー開始以降も、並行して、業者の方がめくれあがった床板を剥がして通路を作り、危険な棚類などを撤去する作業が続いていた。

3. 被災前の第1収蔵庫と民俗資料の整理方法、収納状況

「はじめに」でも述べたが、私はかつて市民ミュージアムで民俗担当の学芸員として勤務していた。本稿は、市民ミュージアムでの民俗資料のレスキューについて、参加者としての立場から報告させていただくものであるが、この項では被災以前同館で民俗資料がどのように整理され、収蔵されていたかを簡単に記しておこうと思う。そうすることによって、被災状況との検証やレスキューの手順、今後の修復計画などにいくらかは役に立つのではないかと考えるからである。

市民ミュージアムでは、収集した民俗資料を次のような手順で管理していた。まず、資料は1点ごと資料カードを作成し資料番号を付与する。この番号は例えば「民98-3-1」となっていれば、「民俗資料として1998年に収集した3件目の資料の1点目」を意味する。資料原簿には「民98-3」の情報として、受入年月日・受入区分・受入先・点数・資料の特性などを記載する。資料には直接白のポスターカラーで資料番号を注記し、その上

にニスを塗ってカバーしていた。原則として1点1点に番号を付けるようにしており、布類などにはバイアステープに番号を記入して縫い付けていた。紙資料など書き込めないものについては中性紙封筒やAFフォルダーに入れてそちらに番号などの情報を記載していた。資料番号は小さい文字で目立たないところに書き込んでいるため見つけにくいので、1点ごと、紙札（5×7cm）をたこ糸で結びつけていた。この札には、資料番号・資料名・受入先・収蔵庫内の収納場所のほか、撮影や修復の履歴などを記載している。さらに、資料はほぼすべて写真を撮っており、画像に資料番号を付けて資料原簿や資料カードのデータと照合できるようにして管理していた。

市民ミュージアムには地下に9室の収蔵庫があるが、民俗資料は第1収蔵庫に収められていた。第1収蔵庫は床面積約450㎡で9室のうち最も広い収蔵庫である。収蔵庫内にはスチール製開放棚が設置されており、その棚や床に記号をつけて場所の管理をしていた。収納している資料はそれぞれ収納場所が決められており、展示や貸し出し、調査などで収蔵庫から運び出しても必ずもとの保管場所に戻すようにしていた。その収納場所の記号が、資料カードと紙札に記載してあった。これは、満杯になった収蔵庫で資料を少しでも効率よく収納するための工夫で、かなり厳密に運用していた。

棚のスペースが限られているので、小さい資料はテンバコに入れて積み重ねて収納していた。一部は蓋付きの収納ケース（市販品）にも収納していた。こちらはテンバコと違って軽く、半透明で中身が確認しやすいので重宝していた。民俗資料には紙資料も多くあり、それらは中性紙箱に収納していた。衣類は木製の箆笥（開館時に、収蔵庫の調度品として設置されていたもので、引き出しタイプと観音扉タイプ、個別引き出しタイプがあり、いずれも重量があった）に収納。他にも、収蔵品である和箆笥の引き出しの中にも古文書や衣類、護符類などを収納していた。

また、収蔵庫の壁面には高さ160～180cmの位

置に手すり状の金具が取り付けられていて、そこに櫛や櫓、長細い形状の漁具や農具などをくりつけていた。収蔵庫は資料で満杯になっており、棚の一番上にも軽量の民具、竹籠類や膳椀、藁製品、長持ちなどを置いていた。

市民ミュージアムの民俗資料が収蔵庫内でどのように収納されていたか、イメージしていただけたらどうか。



被災前の第1収蔵庫

4. 最初のレスキュー

12月12日、はじめて民俗資料のレスキューに参加した。庫内は、10月に見た時より格段に悪い状況になっているように見えた。カビの繁殖と臭いもひどく、あちこちに見たことのないピンク色のキノコや積雪のような菌糸がはびこっていた。



被災後の第1収蔵庫

この日は、第1収蔵庫内に収納されている川崎市指定文化財「黒川の獅子頭」と「大師河原の漁撈具」の状況確認という目的もあった。漁撈具は450点ほどが一括で指定されているため、一つ一つ確認することはあきらめ、黒川の獅子頭を探すことにした。獅子頭は3頭あり、それぞれ布団綿で包んで一つの段ボールに入れていた。幸い、収納されていた棚の近くですぐに見つかったが、段ボールは崩れて腐り真っ黒な何かと混ざり合っていた。雌獅子はもともと塗られていたベンガラ染料が溶け出たようで、梱包材が赤く染まっており、頭の他の部分に色素が移っているのが見て取れた。また、竹かご部分に薄葉紙がこびりついていて、竹の編目にも細かく入り込んでいた。資料の保護のために使用していた薄葉紙や綿布団であるが、今回のような災害では資料への被害を助長してしまうことがあるとわかった。獅子頭は3頭とも見つけたものの、この日はまだ救出先（移動先）が決められていなかったため、その場で可能な限り汚れを除去したあと、収蔵庫内にあったテ

ンバコに入れて別置することしかできなかった。



通路の整備後の状況

12月には計3回レスキューに参加したが、この頃の作業は、入口付近から奥まで散乱した資料を拾い上げ、倒れた棚や収納箆筒を撤去しながらなんとか通路を確保して奥まで進んで行く、というものであった。資料が取り上げられた後から、専門業者の方々によって危険な棚や通路が撤去され整備されていった。そうしてわずかに空いた収蔵庫内のスペースに取り上げた資料を移動していく。とにかく大変だったのが、タバコや収納ボックス、そして民具の中に溜まった汚水を抜く作業であった。一日中、足場も悪い中でドロドロになった水を手作業でくみ上げ、庫外へ運び出した。水抜き作業中、汚水を一時的に貯めていたのは木製の天水桶で、水漏れせずに使用に耐えているのを見てなんとも言えない気持ちになった。

レスキューがぎりぎり間に合った資料もあった。民間信仰の神仏を描いた掛軸を多数収蔵していたが、半数以上の掛軸は修復して中性紙の収納箱に入れていた。ほとんどの掛軸が濡れたままであったので、幸いなことにまだ開けるものがあった。それらの掛軸のうち、三分の一ほどは庫外へ出して乾燥させることができ、市内の講中から寄贈していただいた掛軸のほとんどを救出することができた。そのほかの紙資料は、歴史資料と同様に、見つけ次第ビニール袋に入れて冷凍コンテナへと搬出した。

被災した民俗資料のなかでもっとも悲惨な状況だったのが土人形類であった。市民ミュージアム

には、日本各地の天神人形のコレクションが入っていたが、ほとんどが崩れて水を吸ったクッキーのような状態になっていた。また、ひな人形なども頭部と手足が溶け崩れ、衣裳もひどく傷んでいた。同様に収蔵している衣類の損傷も激しかった。筆筒の中やテンバコの中に長く水が貯まったままであったことから、腐敗が進んだのではないかと思う。筆筒類は水を吸って変形したため引き出しが開かず、中の資料を取り出すことが容易ではなかった。特に収蔵品の和筆筒は破壊して資料を取り出すという訳にもいかなかった。さらに、筆筒類はスチール棚の一番上に乗っているものもあった。水に浮いて棚の上に着地したものと思われる。

民俗資料のレスキューは開始されたが、安全を確保しながら資料を運び出し、処置し、管理する、その場所や方法、体制などが整えられるまではまだクリアすべき要件が多く、準備が必要であった。

5. 被災した民俗資料のレスキューワークショップ

2020年1月14日～17日の日程で、国立民族学博物館の日高真吾氏の指導による民俗資料レスキューのワークショップが開催されることになった。このワークショップは、被災した民具を搬出し、資料のそれ以上の破壊・劣化が進まないよう洗浄や消毒などの処置をする（日高氏はこれを「安定化処理」と呼んでいた）、その一連の工程を実際に作業しながら学ぶというもので、各地の博物館学芸員や川崎市職員など多数参加した。

ここで、実際にどのように進められていたか簡単に記しておきたい。ただし、これは私の参加した範囲での手順であり、県博協のレスキュー参加が一区切りしたあとも市民ミュージアムでは職員の方々を中心に作業が続けられており、その中で手順や処置方法などは改良されていったこともあるかと思う。

【レスキューの手順】

被災民俗資料レスキューの手順は次のとおりである。

(1) 準備

収蔵庫内をゾーンごとに区切って区画番号（記号）を付与し、原則としてゾーンごとに資料を搬出していくように計画する。屋外（市民ミュージ

アム地下の搬入口前にある駐車場）の広い空間にブルーシートを敷き、①搬出した資料の置き場、②洗い場、③洗浄後の乾燥場（屋外と屋内の2か所）を設置しておく。（後日、資料や作業者に直射日光が当たらないようにするため、日除けテントも活用された。）

(2) 搬出と記録

収蔵庫から運び出された資料は、記録係が搬出元のゾーンを確認し、1点ごと札を付けてそのゾーンの記号（アルファベット）と搬出日を記す。この札は耐水性のあるマイラー紙を用い、この後の作業と日付をその都度書き加えていく。なお、搬出する資料は必ず二人で持つことができるものまでとし、洗浄が難しいものや判断に迷うものはテンバコなどに収納し、札を付けて資料があった場所を明記しておき、後ほど検討する。大型資料については作業当日の作業人数や天候、資料の特性などを考慮して判断する。

(3) 洗浄・乾燥

搬出されて札がついた資料は洗い場へ移動して洗浄する。バケツに水を入れ、刷毛で拭うように汚れやカビを落としていく。洗浄は慎重さが求められる、墨書部分や木肌の弱いところをブラシでこすらないよう注意する。一度で落とし切るのは困難であると理解しておくことも必要である。最後にホースで水をかけて洗い流し、乾燥場所へ移動する。ばらばらになっている資料や資料についていた札、付属品などは、チャック付きビニール袋などに入れて一緒にする、もしくはテンバコやコンテナを利用してなるべく離れ離れにならないようにする。洗浄が終わった資料の札に日付と洗浄した旨を記す。洗浄した資料は記録係が写真撮影しておく。

一日の作業の終わりに、屋外で乾燥させていた資料を屋内の乾燥場所に移す。翌日、一晩置いて乾いた資料の状態を確認し、カビや汚れが落とし切れていないものは二度目の洗浄へ回す。

(4) エタノール処理

洗浄と乾燥の終わった資料にエタノールを塗る。エタノール塗布用の場所を別に確保し、エタノール塗布用の刷毛、バケツやカップなどの容器、霧吹き、ウエスなどを用意して作業する。まず、カビが発生していないか汚れなどが残っていないかを確認し、洗い足りないものは、再度洗浄・乾燥に回す。少々のカビの場合は、エタノー

ルで除去する。資料のつなぎ目や重なっている部分などは念入りに塗る。なお、海苔養殖用具の海苔簀は、エタノール液の中に浸けて刷毛で洗浄した。エタノールを塗り終わったらマイラー紙札に日付と「エタノール」と記載し、屋内で乾かす。

(5) 資料移動

エタノール処理後、一晩おいた資料を確認し、

カビの発生などが無いか十分に乾燥しているかなどをチェックし、合格したものを安定化処理済みの民俗資料置き場（市民ミュージアム2階の常設展示場を利用）へ移動する。カビ等の発生が見つかったものは、再度、洗浄もしくはエタノールでふき取るなどの処置を施す。



民俗資料レスキューのようす（2020年1月17日）



収蔵庫から被災資料を運び出す



資料の洗浄



洗浄後の乾燥



エタノール塗布



エタノール溶液での洗浄



エタノール処置を終えた資料



安定化処理を終えて2階に移動した資料

以上の作業を何人かごとチームに分けて担当した。手元のメモの数字からだ、毎日20～25名がレスキューに携わり、4日間でおよそ400点あまりの民俗資料を処置することができた。

このレスキューワークショップではいくつかの課題も見えた。まず、私も含めてほとんどの参加者は被災資料の取り扱いは無経験であり、作業の途中で判断に迷う場面も多かった。そもそも民俗資料はその素材・形状・構造も多種多様で、扱いは難しいと思っているのだが、被災した資料は脆弱で、慎重に取り扱っていても搬出や洗浄の工程ですらに破損してしまうこともある。今回、洗浄には大小の刷毛とブラシ（土器などを洗浄するためによく使われている豚毛のブラシ）を用い、資料の材質や汚れの状況に応じて使い分けていたが、1回の洗浄ではなかなか汚れが落ちないこともあり、ブラシで強くこすってしまったようだ。私も、櫛や櫓を洗浄した際、木の表面にびっしり砂のような黒い粒状の物質が付着しており、ブラシでそっとこすっても落とせず、それ以上はやめておいた。何らかの菌類だと思われるが、これを無理して取り除こうとしていれば木部にたくさんの傷がついたことだろう。

また、収蔵庫のゾーンごとに処置していくのが手順だということは理解できるが、収蔵庫の片隅に置かれたままの衣類や人形、バラバラになった漆器類、箆筒に閉じ込められたままの古文書などを目にすると、一刻も早く処置したい気持ちになってしまった。個人的な意見になってしまうが、指定文化財だけではなく、なるべく早く処置をすべき資料というのも確認し対応できれば良かったと思う。

なお、資料に付けていた紙札は、多くがはずれてしまっており、残っているものも文字がほぼ消えていて資料に固着していることもあった。パウチしていれば良かったが、作業量を考えると無理だったろうとも思った。資料に直接書き込んでいた資料番号は、ニスで保護していたこともあって

ほぼ残っていた。この番号と資料写真を照合すれば、その資料の被災前の姿や資料カードの情報とも照合できる。資料カードは被災を免れているそうなので、部品や付属物が離れ離れになってしまった資料も写真やカードの情報などから復元できるはずである。

6. おわりに

川崎市からの報告によると、被災した収蔵品およそ22万9000点の収蔵庫からの搬出が2020年6月に終了し、現在は修復に向けた作業が進められているという。第1収蔵庫のなかには、収蔵資料の他にも資料収集時に聞き取りをした際の調査や、過去の民俗調査の記録類、民具実測図、古い住宅地図、資料写真・ポジフィルム、民俗映像記録のDVDやビデオテープなど大切な資料が収められていた。これらがどのようになったのか非常に気がかりである。失われてしまったとしたら残念でならない。

2020年12月には、凍結保存していた古文書類の処置を行うワークショップ兼レスキューが実施され、参加させていただいた。民俗資料でも冷凍庫に入れられた紙資料は相当の量があり、今後はこれらの安定化処理が実施されることになるかと思うが、近現代資料には酸性紙の文書も多く、生活雑貨の紙製パッケージや商標ラベルなどはどのような状態になっているのか、こちらも気がかりである。どうしても本務の合間という形にはなるが、今後もレスキューに参加させていただき、一つでも多くの資料を救う手助けができればと考えている。

最後になったが、こうして市民ミュージアムの被災資料のレスキューに関わらせていただけていることを、県博協をはじめ市民ミュージアムの方々、快くレスキューに送り出してくれている本務先の方々にも感謝したい。

（掲載写真はすべて川崎市市民ミュージアムよりご提供いただきました）